

HEAVEN

from
Christmas Card

天国からのクリスマスカード

角本尚彦

Naohiko Kakumoto

【聖書 マタイ福音書 18章 2－4節】

「はっきり言っておく。心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国でいちばん偉いのだ。」

差出人

雪がシンシンと降る寒い日。一面をうっすらと覆う雪で、いつもよりほんのり明るく感じる夕方に、玄関の呼び鈴がなった。ちょうど近くにいたぼくがドアを開けると、ひんやり冷たい空気と一緒に入ってきた雪が、頬にはりついてすぐに溶けた。

「寒かねー！ おい、恵介、この雪の降りようじゃあ、明日までには積もりそうばい。郵便だよ」

クリスマスシーズンからお正月にかけて郵便配達のアルバイトをするユキオは高校時代のサッカー一部の仲間。ゴールキーパーとしては長崎県下では名が知られていることは親友のおれとしても鼻が高い。豪速で飛んでくるサッカーボールをバシバシつかむその大きな手だが、薄白い息を吐きながら慣れない手つきで手渡してくれた。

その日に届いた10通ほどの手紙の中に、腰をぬかすほどびっくりするものが一枚まぎれていた。その手紙の差出人はなんと、2ヶ月前に亡くなったはずのおじいちゃんからだった。

そこにはこう書かれていた。

「メリークリスマス To 恵介！ おじいちゃんだよ。びっくりした？」

びっくりするもつかの間、父ちゃんの兄弟やいところから次々とぼくの家電話があった。対応した母さんの話では、おじいちゃんからのクリスマスカードが届いたのは、どうやらウチだけではないらしい。島原のあちこちに住んでいる家族や親類みんなに届いていたのだそうだ。

「こげん趣味の悪かイタズラばしよるのは誰ね！？・・・」

いらだった父ちゃんのそんな疑いも、封を開けてみたら、とたんに消え去ってしまった。家族や親戚みんなにそれぞれに届いたカードは計34枚。すべて手書き。

その大らかで力強い筆跡は、まぎれもなく確かにおじいちゃんのものだった。

そりゃあもう、みんな、驚いたってもんじゃなかった。

「じいちゃん、もしかしてまだ生きとるんかな??」

「いやいや、確かに教会で葬儀ばしたし、火葬もしたし……」

なんて、親戚がみんな、そのカードを持ち寄って集まって大騒ぎだしさ。

それだけじゃない。もっとビックリなのが、おじいちゃんが生前にいつも財布に入れていて肌身離さずに持ち歩いていた写真のコピーが、どのカードにも貼り付けてあった。それは、先に天国に行ったおばあちゃんと、おじいちゃんとは新婚当時の若かりし頃に農園で二人一緒に笑顔でみかんを収穫している、例のあのツーショット写真だ。

そして極めつけは封筒の裏側に書いていた差し出し住所は『 天国 さいかい市 』って書いてあったんだ……。

大がかりないたずら

八ヶ岳にあるみかん畑で、じいちゃんとはあちゃんの摘果作業を手伝った幼き頃を思い出しながら、穏やかな大村湾を眺めていると、じいちゃんからのクリスマスカード騒ぎのうわさを聞きつけた近所の床屋のおじさんが、慌てた様子でやって来た。彼の床屋は、じいちゃんの若い頃からの行きつけだった。

その床屋のおじさんが、バツの悪そうな表情で口を開いた。

「あの…、実はさあ、このクリスマスカードなんだけど…、あんたのじいちゃんが、どうしてもしたいて言うもんだからさ、カードをポストに入れるのをオレが手伝ったんよ…」

「ええ!? 送ったのはおじさんやったと? じゃあ、カードの中身は誰が書いたと?」

「そりゃあ、恵介、あんたのじいちゃん本人さ」

床屋のおじさんの話から、種明かしをしたらこういうことだった。昔っから大のイタズラ好きだったじいちゃんは、「自分が天国に行っても最後のいたずらがしたい」と、ずいぶん前から、散髪に行くたびにその計画のことをお願いされていたらしい。

「12月25日はおれの誕生日ばってん、クリスマスのパーティーやらケーキやらフライドチキンやらのせいで忘れられることが多かやろ。みんなばぎゃふんと言わせて、25日がおれのバースデーだってこと忘れさせんようにせんば。もうおれも先が長うなかけん。おれが死んだとき、クリスマスカードばあとでポストに入れてくれんね。」

「なんね、あんたの誕生日はキリスト様と一緒にね。そりゃあ、ありがたかねー。」

しかし、結構元気で長生きしたおじいちゃん。計画を立ててから、20年の月日が流れた。でも、88才になって、ついに倒れて入院。容態が次第に悪くなり、ちょうど亡くなる一週間前に床屋のおじさんが、お見舞いに行ったら、

「やっと今年こそはカードば送る事ができるね」

と、じいちゃん、肩を揺らしてウフフと笑ったそう…。

じいちゃんの20年温めていたイタズラに、家族や親せき一同、まんまといっぱい食わされたってわけだ。

「じいちゃんらしかネ。」

そのじいちゃんの計画に、みんなでお腹を抱えて笑った。そして、泣いた。

空っぽの郵便受け

12月25日の朝。積もった雪が見えないぐらいに、濃い霧が西海市を覆っていた。去年の今頃は、クリスマスカードがたくさん届くはずなのに、郵便受けはまだ空っぽのままだった。クリスマスが近づくにつれて、郵便配達姿がずいぶん板についてきたユキオだが、この数日間は見かけていない。すると、大村湾の岸部から一帯にたちこめる霧の中から、人影がこちらに近づいて来た。

「おおい！ 今日遅かったねえ。ユキオ……」

霧の中から姿を現したのは、この辺では見かけたことのない見知らぬ男だった。手を大きく振りながら近寄ってくる男の笑顔に、なんだか懐かしい感じがした。

「よお、恵介、元気にしとったか？」

心臓が止まりそうになった。

うるんだ瞳のその優しい笑顔と、その声を聞いたとき、その人が誰か自分にはスグにわかった。それは紛れもなく、じいちゃんだ。その笑顔は若かりし頃のあの写真そのものだった。

「じいちゃん……！」と、叫びそうになった僕の口に、おじいちゃんは右手の人差し指を当てて、言葉をさえぎった。まるで隠れんぼでもしてるかのように「シーッ」と、左手の人差し指を自分の口に当てて、あのイタズラっぽい、くったくの無い笑顔で、内ポケットから取り出した一枚のクリスマスカードを僕に手渡した。じいちゃんは、小さい頃のおれにいつもしてくれていたように、ポケットから小粒のみかんをたくさん取り出して、おれの両手に乗せた。

そして、そそくさと、霧の中へと消えていった。

するところでは、山の方面のやぶの中から床屋のおじさんが慌てて飛び出してきた。凍った地面に、何度も滑ってころびそうになりながらも、走ってきたらしい。

息を切らせて言った。

「恵介、たいへんばい！ 今日、おまえのじいちゃんから、クリスマスカードが届いとったぞ！ これはオレじゃなか！ これは、オレは送とらんぞ！」

床屋のおじさんは震える手で、一枚のクリスマスカードを取り出して言った。差し出し人は、じいちゃん。差し出し住所は、やっぱり天国、さいかい市だ。

「恵介。今回のはいたずらじゃなくて、本物だよ！」

さっき、じいちゃんから受け取ったみかんをほおぼりながら、クリスマスカードを開いてみた。

メッセージ

「親愛なる恵介へ。ハッハッハー！びっくりしただろう？

実は、『天国からチョット抜け出して、クリスマスカードを届けさせてくれ』って、神様にこっそりお願いしたんだ。

まあ最初はダメって言われたけど、何度もしつこくお願いしたら、神様、渋々OKしてくれたよ。

遅かれ早かれ、みんなもそのうち、こっちに来ると思うけど、また会おう！

それまで元気でな！良いクリスマスを！

追伸。中に入れといた写真は、こっちにに来てから妻と一緒に育てたみかんの木から、初収穫したときに撮ったんだ。

天国では、みんな若返って年もとらないぞ。

どうだい、昔のようにおれは良か男、彼女は美人だろう？

天国でも相変わらず尻にひかれてるけど仲良くやってるよ。

天国、さいかい市から。」

変わらぬ愛

「てんごく。。さいかい。
天国で再会。。」

そう言いながら、八人ヶ岳の上の空を見上げてみた。

「さいかいって、英語でシー・ユー・アゲインだよね」

さっきまで立ち込めていた霧はすっかり晴れて、銀幕と呼んでいいほど一面を覆った雪が、キラキラと朝日を照り返していた。

家族や周囲にいる人たちを笑顔にしてくれる、じいちゃん。
ぼくもこの地上にいるあいだは、そんな生き方をしたい。
心からそう思った。

「さっきじいちゃんからもらったみかんは、天国産だな」
ユキオが無理に冗談を言った。

アルバイトを終えたユキオが遊びにきたので、八人ヶ岳のみかん畑まで一緒に登った。じいちゃんが大事に育てた木には、たくさんの赤みがかかったみかんが鈴なりになっていた。

「ああ、甘か。。。うまか、うまかばい、じいちゃん！！」
甘いみかんの味は、いつしか涙の味に変わった。

「こりゃ、みんなにも食べてもらわんば！」

二人のショルダーバックのチャックが締めきれなくなるまで、みかんを取れるだけ取り続けた。

じいちゃんのみかんの木、来年もまた食べられるよう、これから自分が手入れに来よう。そう思った。
ありがとう、じいちゃん。ありがとう・・・

いつか教会のクリスマス会で歌ったことのある賛美歌をユキオと一緒に歌いながら、長い坂道を降りた。

寒い空にこだまする歌声は、まるで天国まで届くかのように響き渡っていた。

『天国からのクリスマスカード』

<http://p.booklog.jp/book/62770>

著者：角本尚彦

著者プロフィール：

角本尚彦 かくもとなおひこ。青森県むつ市出身。株式会社大地のいのち「長崎うまかもんネット本店」店長。
。 <http://umaka777.net/> 4人の子どもの父親。クリスチャン。長崎県西海市に在住。海藻などの有機肥料や微生物サンビオティック農業（ <http://www.sunbiotic.com/> ）による土づくりで、農業技術指導・農業資材開発・安全安心な農作物を育み産地直送する農業法人“株式会社大地のいのち”で、子供たちの未来に将来と希望を託すため、「農を通して人を育む」グローバルな取組に参加している。
今後も、長崎県西海市を舞台とした短編ノベルを通して、西海地域の産業と農業のPRと活性化を願っている。

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/62770>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/62770>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（ <http://p.booklog.jp/> ）

運営会社：株式会社ブックログ